



本会記事

■第37回プラズマ・核融合学会年会報告

現地実行委員会委員長 神野雅文 (愛媛大学)

第37回年会在2020年12月1日から12月4日の日程で、愛媛大学城北キャンパスをホストに完全オンラインで開催されました。秋季講演会の時代から通して、愛媛大学にとどまらず四国では初めての開催です。また、オンラインでの年会開催もプラズマ・核融合学会にとって初めてという、初めてづくしの開催となりました。

愛媛大学は松山市の中心に位置しており、すぐ横に路面電車の電停があり、道後温泉まで2km、繁華街まで1km、松山城まで300mという非常に便利なロケーションにあります。また、松山市へのアクセスとしてメインになる空路では、松山空港まで羽田から1時間半、伊丹や中部国際空港から1時間ほどで、そこから松山市の中心までリムジンバスで20分という便利な環境ですので、皆さんにお越しいただけるように準備を進めておりましたし、松山への出張のついでに道後温泉や松山城をめぐるのを楽しみにしておられる方もいらっしゃったかと思えます。またいつか、実際に松山にお越しいただける機会があれば、と願っています。

当初はオンライン開催など全く頭になく、例年通りの大会運営を予定して会場を確保していました。結果的には全く使用することはなかったのですが、後年、また愛媛で開催する機会があったときのための記録として、予定していた会場の概要を記しておきます。口頭発表の会場は400人収容の愛媛大学の南加記念ホール、そのホールから道を挟んで向かい側にある松山市教育研修センターの大講義室(132名収容)、中研修室(90名収容)、小研修室1から3を連結した大研修室(108名収容)を、ポスター会場は愛媛大学の食堂3階のホールをそれぞれ予定していました。会期中の事務局と貴賓室は松山市教育研修センター1階会議室と2階の会議室にそれぞれ確保していました。その他、万が一ポスターが会場に収まらない時などのために、愛媛大学校友会館2階のセミナールーム、講義室とメディアセンターのメディアホールを



図1 年会Head Quarterでの各講演会場の一括管理の様子。

確保していました。また、懇親会と若手フォーラムの会場として、奥道後温泉のホテル、サッカー会場には愛媛大学の山越グラウンドを利用する予定でした。

実際には、新型コロナウイルス感染症の状況を鑑みて、2020年の10月には理事会で完全オンラインでの開催とすることが決定されました。完全オンラインといっても、各講演会場の進行状況をモニタシトラブルに対して一元的に管理するヘッドクォーター(HQ)はリアルな空間として必要になります。また、HQには複数のオンライン会議室と同時に接続できるだけ安定した通信環境も求められます。そして少なくとも会期の前日から最終日までHQを維持できなければなりません。平日は大学では講義があるため、このような条件を満たす部屋は見つけるのが意外と難しかったのですが、実行委員長神野の所属する学科の会議室(有線LANでのしっかりとした通信環境に加えて無線LANも利用可能)を年会の前の週から2週間にわたって使用させてもらえることになり、HQの問題については解決することができました。実は新型コロナ対応で制限が厳しくなると23m²につき2名しか収容できなくなるため、HQに使える部屋がない恐れもあったのですが、年会開催期間はそこまで厳しい制限にはなっていなかったため、助かりました。また、11月後半から俄かに愛媛県内、特に松山市の新型コロナウイルス感染症の感染者が増え始めていたため、学内で複数の感染者が出てクラスター認定されると即日大学がロックアウトになり年会ホストが難しくなる、というリスクと背中合わせの開催だったのですが、会期前から原稿を執筆している現在まで松山市内では新規感染者の発生が続いており、愛媛大学に感染者が発生していないことは天恵といえるかもしれません。

期間中の参加者は、732名(正会員299名、学生会員(講演者)258名、シニア会員(講演者)13名、会員外16名、学生会員(聴講のみ)23名、学生非会員106名、シニア会員(聴講のみ)17名)でした。講演件数は、一般講演447件(口頭発表168件、ポスター発表279件(ポストデッドライン講演含む))、シンポジウム8件、招待講演15件、特別講演1件でした。またインフォーマル会合4件、企業セミナー5件も行われました。

ポスター発表はRemoというポスター発表ソフトを使っ



図2 年会のZoom会議室の背景の一例。

てオンラインで実施しました。バーチャルに5階建てで各階20件のポスターと4つの企業ブースを用意しました。開催してすぐに気づきましたが、各フロアに目一杯20件のポスターを割り当てるのではなく、対面実施でよくあるように、フリーテーブルをいくつか用意して、参加者同士でディスカッションや打ち合わせをできるようにしておくべきでした。この点はもし今後オンラインでポスター発表を実施される場合には改善点としてご検討いただきたいと思います。

口頭発表は馴染みのある方も多いZoomを用いて実施しましたが、現地のスタッフとして工夫したのは、講演者に経過時間を知らせるベルの音と時間経過をどのように届けるか、という課題でした。事前に実験を何度も繰り返した結果、ベルの音はスマホアプリではうまくZoomで再生されないこと、従来のように金属ベルを用意して会話の音声の切れ目を狙って直接手で鳴らした音をマイクで拾うと音量も十分ありクリアに再生されることがわかりました。そこで、ベルをかき集めて会場担当のアルバイトの学生さんと、良い塩梅のタイミングで上手にベルを鳴らしてくれるように打ち合わせし、実際にそのようにうまく進行してくれました。経過時刻の表示は、スマホアプリのタイマーの画面をWEBカメラで拾って会場担当の画像として配信しました。これらの工夫は必要でしたが、皆さんがZoomに慣れておられることもあり、大きなトラブルもなく無事口頭発表のセッションを終えることができました。

懇親会は対面では実施できませんでしたが、バーチャルに複数回実施され、大いに盛り上がったと伺っており

ます。また、開催地らしさを出すイベントとして計画した俳句コンテストには28名の方から58句の投句をいただきました。これらの句の中から、松山でご活躍の俳人榎部天思先生に優秀な作品をご選出いただき、最終日のクロージングで結果発表と講評をいただきました。この俳句コンテストは皆様にご好評をいただけたようでホッとしています。

本年会の開催にあたっては多くの皆様からご支援とご協力をいただきました。実は、年会の前週に愛媛大学の警戒レベルが引き上げられ、愛知県からの来訪者の学内立ち入りが強く自粛を求められる状況になりました。そのため急遽、実験室をサブHQに充てて学会事務局にここに詰めていただき学内の教職員との接触を局限するという対策をとることで、事務局の来学を認めていただきました。この形態での運営をお認めいただきました大橋雄一学長、高橋寛工学部長にお礼申し上げます。松山にお越しいただいた事務局北澤さんには個室に軟禁状態となり大変申し訳ありませんでした。学会の森雅博会長や中井光男年会運営委員長をはじめ、学会理事会や事務局の皆様には円滑な年会運営とプログラム編成に大変ご尽力いただきましたことを心より感謝申し上げます。また、Zoomのウェビナーをご提供いただきました核融合科学研究所の西谷健夫先生には深く感謝申し上げます。

最後に現地実行委員会の皆様の名前を記し、その献身的な活動に心より御礼申し上げます。前原常弘先生(理学部)、本村英樹先生(工学部)、池田善久先生(工学部)、アルバイト学生の皆さん。どうもありがとうございました。

■各領域からの報告

基礎領域

領域長 荒巻光利(日本大学)

基礎領域のプログラム編成は、領域長の荒巻(日大)、副領域長の和田氏(同志社大)、プログラム委員の稲垣氏(九大)、門氏(京大)、岸本氏(京大)、坂和氏(大阪大)、永岡氏(NIFS)、吉村氏(NIFS)によって行った。今回はシンポジウム2件、オーガナイズドセッション2件を企画した。

初日の午後に、シンポジウム「ホイッスラー波の物理と応用」が行われた。坂和氏(大阪大)の趣旨説明後、加藤氏(東北大)による地球磁気圏におけるホイッスラーモード・コーラス放射と波動粒子相互作用、天野氏(東京大)による衝撃波電子加速におけるホイッスラー波の役割の衛星観測を中心とした報告があった。次いで、佐野氏(大阪大)から高強度レーザーを用いた高密度プラズマのホイッスラー波加熱の粒子シミュレーション結果が報告された。さらに、円筒境界を持つ実験室でのホイッスラー波であるヘリコン波の応用例として、諫山氏(九州大)からヘリコン波による高密度プラズマ生成の物理に関する数値計算の結果が、高橋氏(東北大)からヘリコン波プラズマを用いた宇宙工学と地上産業応用の実

験結果が報告された。宇宙から基礎・応用、さらにはレーザー核融合に至る、密度で約23桁、周波数で約11桁にも及ぶ広いパラメータ領域のプラズマ・波動相互作用現象をホイッスラー波という切り口で議論することができ、異分野横断によるさらなる研究の進展が期待される。

2日目の午前に開催された「実験室プラズマ・天文プラズマ連携セッションー加熱・輸送・乱流現象を中心に」では、2件の招待講演と8件の口頭発表、5件のポスター発表があった。ブラックホール撮像(EHT)や超新星爆発現象から太陽コロナに関する話題までプラズマが関係する現象を中心に話題提供があった。実験室からもレーザープラズマの衝撃波や磁化プラズマの波動励起、流れによる乱流輸送などの話題提供があった。機械学習による太陽表面乱流観測とシミュレーションから観測不可能パラメータの推定に関する解析手法の開発が招待講演として紹介された。この研究は、NINSの支援で活動しているSolaboXプロジェクトの成果であり、このような連携研究の興隆、活性化がこのセッションの目的であり、多くの聴衆が参加する活発な議論が展開された。

2日目の午後はオーガナイズドセッション「データ駆動プラズマ科学-インフォマティクスで発見を加速する-」が開催された。前回に引き続き2回目の開催であった。西澤氏(独マックスプランク研究所)による「輸送

モデルと二階微分量に基づく正則化を用いた不良設定環境下におけるパラメータ推定」と題した招待講演にて核融合プラズマの計測に対するベイズ推定の適用が説明された。統計モデリングを援用した計測の高度化がルーチン的に行われるようになってきた。続く6件の口頭発表にて、敵対的生成ネットワーク、データ同化、サロゲーションモデリング、ネットワーク解析、先進コンピュータトモグラフィ、特異値分解といったインフォマティクスで頻りに用いられている手法のプラズマデータへの適用について報告があり、活発な議論が行われた。

3日目の午後にシンポジウム「離散と連続状態を移り変わるプラズマの物理と研究手法」が行われた。藤井氏(京大)、鈴木氏(NIFS)、佐々木氏(九大)、朝比氏(原研)、加藤氏(産総研)の5件の発表において、原子分子のスペクトルによく見られる連続と離散成分の由来、性質、解析手法から始め、プラズマの連続と離散的な性質の間の遷移が、プラズマ乱流の研究や、レーザーアブレーションをはじめとするさまざまな研究の中でしばしば重要な役割を果たすことが示された。そして今後の実験、理論、シミュレーション研究、とりわけデータ科学を活用した解析手法について議論し、それらをプラズマ制御技術、EUV光源開発などの応用にどのように役立てるかについて議論した。

以上のシンポジウムおよびオーガナイズドセッションに加え、基礎領域では47件の一般口頭発表、73件のポスター発表が行われ、活発な議論が交わされた。一般講演とポスター発表に対して若手学会発表賞の選考が行われ、基礎領域からは学生会員部門で4名が受賞した。

応用領域

領域長 渡辺隆行(九州大学)

応用領域のプログラム編成は、領域長の渡辺(九大)とプログラム委員の市来氏(大分大)、大熊氏(パナソニック)、木下氏(アイオーコア)、栗原氏(キオクシア)、佐々木氏(北大)、神野氏(愛媛大)、豊田氏(名大)によって行った。今回はシンポジウム2件(大気圧近傍におけるプラズマ生成とその応用、プラズマによる生体荷電制御科学の進展)、オーガナイズドセッション2件(プラズマプロセスの高精度制御、プラズマと生体の相互作用)を企画した。

初日はオーガナイズドセッション「プラズマと生体の相互作用」として、高木氏(岩手大)による招待講演「時空間制御された電場・プラズマ場での水・タンパク質・生体の状態変化」と8件の一般講演が行われた。この分野は科研費の新学術領域、基盤研究Sなどの大型予算を獲得しているテーマであり、プラズマと医療・農業・生命科学などの新しい異分野横断研究としての研究が報告された。

生体物質とプラズマ(荷電等)の相互作用において、物理的・化学的・生物学的・医学的視点で荷電等を作用点とした生体への効果の理解を深化させることを目的として2019年4月に専門委員会「プラズマによる生体荷電制御の科学」が設立された。この専門委員会からの提

案として、昨年の「プラズマによる生体荷電制御科学の夜明け」に続き、今年は「プラズマによる生体荷電制御科学の進展」と題するシンポジウムが開催された。このシンポジウムでは榊田氏(産総研)による趣旨説明のあと、神野氏(愛媛大)による遺伝子・分子導入現象、内田氏(都立大)によるプラズマ-生体間の電荷・電界の直接制御、清水氏(産総研)によるプラズマ照射による液中物質の凝集と溶解に関する発表があった。最後には白谷氏(九大)の総括によって、これらの現象解明や今後の課題に対する活発な総合討論が行われた。

2日目はオーガナイズドセッション「プラズマプロセスの高精度制御」として、田中氏(金沢大)による「原料を同期間歇導入した変調熱プラズマでの原料蒸発とナノ粒子生成モデリング」の招待講演と8件の一般講演が行われた。低温プラズマプロセス、熱プラズマプロセスのどちらでも従来のプロセスに比べると格段に厳しい高精度制御が求められており、課題解決の新たな方向性を見出すための発表が行われた。

3日目はシンポジウム「大気圧近傍におけるプラズマ生成とその応用」が市来氏(大分大)のとりまとめによって開催された。市来氏による大気圧プラズマ窒化のメリット・デメリットに基づく趣旨説明のあと、茂田氏(阪大)によるプラズマ流の数値解析の研究動向に続き、田中氏(九大)による多相交流アーク、鈴木氏(名大)によるマイクロ波プラズマ、伊藤氏(東大)によるマイクロ液相を用いた大気圧プラズマによるそれぞれの新規材料プロセスの発表があった。大気圧近傍のプラズマには低圧プラズマにはない特徴があり、この特徴を活用したプラズマプロセスの進展が期待できる。今回のシンポジウムでは、単に大気圧近傍のプラズマを材料プロセスに用いるという考えではなく、新しいプラズマ生成とその特性をしっかりと理解したうえでプラズマプロセスへ応用するというシンポジウムであった。

Remoによるオンラインのポスター発表は、初日11件、2日目15件、3日目6件のポスター発表があり、活発な議論が行われた。以上の一般講演とポスター発表に対して若手学会発表賞の選考が行われ、応用部門では正会員部門1名、学生会員部門3名が受賞した。

核融合プラズマ領域

領域長 大野哲靖(名古屋大学)

本領域のプログラム編成は、横山氏(NIFS)、出射氏(九大)、篠原氏(東大)、江尻氏(東大)、白神氏(阪大)、大野(名大)で行った。

初日には井手氏、森山氏の招待講演があり、間もなくファーストプラズマを迎えるJT-60SAのコミッションングの最新状況について報告があった。また、炉工分野との合同の招待講演では、浅井氏(日大)、武田氏(IAEA)より、欧米における核融合研究開発に関する民間企業貢献の拡大状況が報告された。また午後には小川氏(NIFS)から、LHDの中性子計測による高エネルギー粒子閉じ込め研究成果に関する招待講演があった。さらに、オーガナイズドセッションとして、「高専における放電プラズ

マ教育研究の広がりや展望」が開催され、高専における様々な研究活動と教育ツールとしてのプラズマの活用について報告があった。

2日目の午前には、若手学会発表賞（正会員部門）対象者による発表が行われ、活発な質疑応答が行われた。午後には、「核融合炉においてヘリウムプラズマ-壁相互作用がもたらす問題点の整理と課題克服への対応」というシンポジウムが開催され、吉田氏（九大）の趣旨説明のあと、ヘリウムプラズマ照射による表面損傷過程、共堆積効果、表面構造変化に与えるスパッタリングの影響、水素同位体滞留に対する影響、核融合装置の粒子バランスに対する影響について、それぞれ坂本氏（NIFS）、梶田氏（名大）、伊藤氏（NIFS）、大矢氏（静大）、花田氏（九大）から発表があった。夕方には、全領域合同の「2030年代以降を見据えたプラズマ・核融合科学の学術課題」シンポジウムが開催された。森氏（光産業創成大）の趣旨説明に始まり、サイエンスチャートアンケート結果のまとめについて笠田氏（東北大）から報告があり、その後、プラズマ科学、核融合プラズマ、炉工学の学術課題について、それぞれ比村氏（京都工繊大）、仲田氏（NIFS）、江原氏（東北大）から発表があった。150名近くの参加者が、当シンポジウムに対する関心の高さが見られた。

3日目の午前中には、若手学会発表賞（学生会員部門）対象者による発表が行われ、次世代を担う学生諸氏の素晴らしい研究成果が報告された。午後は、理論・シミュレーション研究に関して、Andreas Bierwag氏（QST）の招待講演に続いて、8件の口頭発表が行われた。また、それと並行に周辺プラズマ・ダイバータ、慣性核融合に関する口頭発表も行われた。

最終日の午前中には、炉工学との合同シンポジウムとして「高温超伝導技術が切り拓く新たな核融合研究展開」が行われた。橋爪氏（東北大）の趣旨説明後、さまざまな高温超伝導マグネットの開発状況について、柳氏（NIFS）、伊藤氏（東北大）、野口氏（北大）から報告があった。また、磁気浮上内部導体装置RTプロジェクトの成果について小川氏（自然科学研究機構）から、高温超伝導技術が炉設計に与える影響について後藤氏（NIFS）から報告があった。

また、初日46件、2日目40件、3日目43件のポスター発表があり、オンライン（Remo）開催であったが、活発な議論が行われた。

以上の発表に対して若手学会発表賞の選考が行われ、正会員部門4名、学生会員部門7名が受賞した。

核融合炉工学領域

領域長 小西哲之（京都大学）

工学領域提案のシンポジウムは、「原型炉研究開発共同研究の進展」であった。原型炉共同研究は、ITER活動の主力が建設と調達機器の製作に移る一方で研究者のメインターゲットになりつつあり、QSTとNIFSの両面からアクションプランに対応したプロジェクト志向の活動が開始されている。QST、NIFSでは具体的な原型炉

技術と先進技術で視野が若干異なるが、わが国研究コミュニティの原型炉に向けた活動が整合性をもって長期計画に取り組んでいることが示された。このほかに、全領域の「2030年代以降を見据えたプラズマ・核融合科学の学術課題」、核融合プラズマと合同の「核融合炉においてヘリウムプラズマ-壁相互作用がもたらす問題点の整理と課題克服への対応」に加え、セッション枠として核融合プラズマと共有の形になった「高温超伝導技術が切り拓く新たな核融合研究展開」があった。ヘリウムプラズマ壁相互作用は、まさしく核融合装置の運転の上でも物理でも、またダイバータや第一壁の材料や工学でも、実用学術様々な面でホットな話題であり、領域を超えた情報交換の好例であった。学術展開にも大きな興味がある一方、今後の核融合装置ではタングステンとヘリウムの関係は実用上も重要な知見であろう。高温超伝導（HTS）は、ITERでも世界の原型炉でもまだ具体的な核融合実用化への開発とみなされていないが、最近の進展は目覚ましく、今後の核融合研究の流れとして、工学的にも無視できないテーマがタイムリーに提示されたといえる。

招待講演は、工学領域としてQST春日井氏のA-FNSの概念設計、九大片山氏の超臨界CO₂とトリチウムに関する講演のほか、核融合として初めてのIAEA職員である武田氏より「IAEA核融合研究開発政策と国際協力の新潮流」の報告があった。直前の日大浅井氏の講演とともに、世界的にスタートアップ企業によるイノベティブな核融合開発が新たな潮流となりつつあることが指摘された。

オーガナイズドセッションは「トリチウム」とだけ題して、核融合材料とトリチウムの相互作用、レーザー核融合原型炉設計、除染、産業界の取り組み、環境挙動、生物影響から社会受容性に至るまで、多彩な報告をまとめ、核融合実用化に向けて避けて通れない諸問題を横断的に扱った。一方ではDT固体の物性など極めて基礎的な興味ある課題も報告されている。今後定着するかわからないが、専門分野にかかわらず、核融合研究者コミュニティ全体で共有すべき情報の提示に努めていきたい。

工学領域では、相互に比較的関連性の少ない研究もある一方では、核融合プラズマや応用とも接点のある発表があり、今回も、ITER、トカマク原型炉、ヘリカル炉、JT60SA、トリチウム・燃料系、タングステン材料から核融合エネルギー利用など、広い範囲からのトピックが網羅されている。特に原型炉に向けた研究は、ITERの延長や現在の原型炉設計に即したもののほかにも、研究テーマも基礎的・萌芽的なものから先進技術を用いた核融合炉志向まで様々な性格の広がりがあり、盛況だったといえるであろう。感染症対策で初めてのオンライン開催ではあったが、ZOOMでのセッション運営は、講演者参加者ともにスムーズであり、質疑も対面会合と変わらず活発に行われた。ポスターについては、不慣れな点や問題点も経験されたようであるが、工学分野においても総じてオンライン開催は成功だったといえ、現地と事務局のご尽力に改めて感謝する次第である。

第 37 回年会 若手学会発表賞 選考結果の報告

一般社団法人 プラズマ・核融合学会
推薦(学会賞)委員会委員長 竹入康彦

初のオンラインにて開催されたプラズマ・核融合学会第37回年会において、優秀な発表をした若手研究者を表彰する若手学会発表賞(協賛: 未来エネルギー研究協会)の受賞者を下記のとおり選出いたしました。なお、昨年より本賞の審査は正会員と学生会員の2部門に分けて実施しており、申請者に研究概要を提出していただいています。131件(口頭発表60件, ポスター発表71件)の申請に対して、合計99人の会場審査員に審査をお願いし、その採点に基づいて推薦(学会賞)委員会において審議・決定いたしました。受賞者の皆様、おめでとうございます。また、熱心に審査にあたっていただいた会場審査員の皆様、ならびに事前準備と審査結果の集計にご尽力いただいた年会運営委員会委員および事務局の皆様、に厚くお礼申し上げます。表彰式は、2020年12月4日の第37回年会クロージングの前に執り行いましたので、併せてご報告いたします。

■受賞者**正会員部門:**

【基礎】該当者なし

【応用】

・01Ba07 佐々木渉太(東北大)
「活性窒素種精密制御プラズマ源を用いたアミノ酸の化学修飾」

【核融合プラズマ】

・2P83 牛木知彦(QST)
「2重2波長法: ITERダイバータ赤外サーモグラフィのための超広温度範囲(200°C-3600°C)サーモグラフィの新手法」

・02Ca04 小林達哉(NIFS)
「内部輸送障壁の同位体効果とその背景物理の実験研究」

・02Ca05 隅田脩平(QST)
「JT-60Uにおける遅波のイオンサイクロトロン放射を駆動する高速イオンの同定」

・02Ca07 田中宏彦(名大)
「Magnum-PSI 非接触プラズマ中における非拡散的輸送増大現象」

【核融合炉工学】

・3P66 福田誠(QST)
「ITERダイバータ外側垂直ターゲット用タングステンの量産化に向けた性能評価」

学生会員部門:**【基礎】**

・01Aa03 杉本馨(阪大)
「多次元輻射粒子シミュレーションによるレーザー駆動重金属プラズマ形成の理論解析」

・3P08 今井涼二(東北大)
「磁気ステアリングによるヘリコンスラスタの推力ベクトル制御の検証」

・3P12 太田雅人(阪大)
「EO サンプリングを用いた相対論的電子バンチの縦横方向電荷密度同時計測」

・03Aa02 川崎昂輝(阪大)
「レーザー核融合の衝撃波点火方式における高速電子の発生と吸収及び衝撃波圧力への寄与についての評価」

【応用】

・2P29 宮口和也(名大)
「He-Ti 共堆積環境下におけるナノ構造Ti薄膜形成と光触媒作用によるエチレン分解」

・02Ba06 稲垣慶修(北大)
「プラズマと相互作用する液体における溶媒和電子の検出と反応性」

・03Ba04 松井和希(九大)
「ロングDCアークによる難分解性ガスSF6の分解機構」

【核融合プラズマ】

・1P075 福山雅治(九大)
「球状トカマク装置 QUEST における電子バーンシュタイン波輻射計の開発」

・2P75 宗近洗洋(東工大)
「Python ライブラリ Raysect を用いた小型トカマク装置における可視光トモグラフィー」

・3P52 安田幸平(名大)
「TOKASTAR-2における上下三角形コイルによる非軸対称磁場の垂直位置安定性への効果」

・3P60 栢野大樹(筑波大)
「GAMMA10/PDX セントラル部での印加波動に起因するICRF 差周波波動によるイオン加熱の計測」

・03Ca03 山本泰弘(京大)
「ヘリカルプラズマにおけるECHによるトロイダル流の駆動」

・03Ca05 渡邊将翔(福井大)
「100 ~ 200 GHz 帯超多周波数発振の実現を目指した三

段共振器ジャイロトロンの設計」

- ・03Ca08 染谷諒（東大）
「4視線ドップラー分光プローブを用いた磁気リコネクションのイオン加熱・加速機構の実験的検証」

【核融合炉工学】

- ・03Dp08 荻野靖之（京大）
「LHD 真空容器内部における放射性核種の検出とその分布測定」

若手学会発表賞のための推薦(学会賞)委員会
委員長：竹入康彦
委員：荒巻光利，大野哲靖，小西哲之，出射 浩，
渡辺隆行
会場審査員：99人

■第37回年会 ポストデッドライン講演

ポストデッドライン講演として以下の2件を採択しました。

37PD01

ITER ポロイダル偏光計の光学機器の設計の進展

○今澤良太，小野武博，波多江仰紀（量研）

37PD02

ST-2 球状トマカクにおける低域混成波誘起輸送モデル

○江尻晶，山崎響，高瀬雄一，辻井直人，篠原孝司，
渡邊理，吉村泰夫¹⁾（東大，¹⁾核融合研）

■第37回年会記念 プラズマ俳句コンテスト
結果報告

応募数28名，59句の中から，「天」1句，「地」1句，
「人」1句，「並」2句の優秀作5句を，松山でご活躍の
俳人榎部天思先生に選句いただきました。多数のご応募
をいただき，ありがとうございました。

天「爽やかに核の学者の名のホール」嶋村耕平さん

地「核融合 千年先の 天の川」相良明男さん

人「秋の婚 恩師が語る 核融合」小島信一郎さん

並「今昔の世界どよめく稲妻に」鎌滝晋礼さん

並「プラズマのむらさきの色 クリスマス」横山達也さん

兼題：「プラズマ」，「核」，「核融合」，または自由題